

## 「定番」英和辞典の過去・現在・未来



投野由紀夫

英和辞典で「定番」とは何だろうか？そしてそれらはこの特集の趣旨にのっとって考えた時に、過去のある時点で「定番」となるきっかけがあったのだろうか？そして、未来の英和辞典を考える時、「定番」になるであろう要素を現在の動向から予見できるか？なかなか難題であるが、興味深いテーマなので私論を展開してみよう。

### 英和辞典——「定番」の根底にある潮流

英和辞典で現在最も売れているのは「ジーニアス英和辞典」(大修館書店)である。「ジーニアス」が現れる前は研究社の「ライトハウス英和辞典」で、その前のロングセラーは同じ研究社の「新英和中辞典」だった。このような売り上げ部数の調査を出版社はかなり独自にしているわけだが、それらを長期的に見てみると、あるトレンドが浮かんでくる。それは「詳しい」→「やさしい」→「詳しい」→「やさしい」の繰り返し、ということである。英語教育全体の現象を見ても、教授法にも言語理論にもトレンドがある。しかし、面白いもので科学の理論の大きな流れが経験主義と合理主義の繰り返しであるように、辞書の嗜好にも「詳しくて何でも出ている」という辞書がもてはやされる時期と、「やはりわかりやすく見やすい辞書がいい」という時期が繰り返されているのである。

【新英和中辞典】は当時の学習辞典のノウハウの結晶であった。その文型情報と語法記述の素晴らしさは当時の世界的にみてもトップクラスの辞書編纂レベルにあったと言えよう。しかし学校現場はより高校初級にターゲットを置いた【ユニオン】、その後継の【ライトハウス】志向に徐々に傾いていった。その理由は明らかに後者が「わかりやすい」からだった。ゆったりとした段組、例文を full sentence にすること、かみくだいた語法注記、語義の精選などが新しい学習辞典

のモデルを示した。

しかしその逆を行ったのが「ジーニアス」である。今度は学習辞典レベルでは非常に精度の高い語法注記が瞠目すべき特徴となった。執筆過程での参考図書利用の徹底ぶりは尋常ではなく、「ジーニアス」初版は語法専門家がとにかく国内外主要文献の語法情報をすべて漏らさずチェックする非常に骨の折れる作業を経て原稿になっている。そういった語法プロ集団の気骨が現れた作品になったのが、英語教師の語法好きと相俟ってベストセラーとなった所以だろう。

実際、辞書の好みでいうと「ジーニアス」派と「ライトハウス」派は結構分かれるところである。前者は語義を最低 COD レベルまでは総ざらえしないと気が済まない。後者は逆にその半分くらいまで語義を絞り込む代わりに、他の学習上有効な情報を盛り込もうとする派である。これは学習辞典を編纂する際に、編集委員がかなり悩むところであり、どちらがより優れた方向性というわけでもない。かなり嗜好の問題である。悩んだ結果、研究社はもう一つ上の「カレッジライトハウス」を世に送り一矢を報いた。競合する市場に逆に乱入していくという方法を取ったわけだ。

### 「学習者中心」が定番を産む

これら英和辞典の情報の中でいわゆる「定番」といえる特徴は何だろうか？通常の本国人用の英語辞典にあるものは除くとして、学習英和辞典にある定番的特徴というと、名詞の加算・不加算表示 ([U][C])、文型(動詞型)表示、学習上の語法注記、などであろうか。

これらの先鞭をつけたのはかなりさかのぼるが A. S. Hornby の *Idiomatic Syntactic English Dictionary* (1942) であった。この序文に当時の語学教育研究所長の市河三喜博士が「この辞典の特色として先づ挙

げたいのは、(中略)名詞に countable, uncountable の別を示し、動詞の型を明かにしたこと」と述べている。これは Hornby および *ISED* の土台を作った Palmer の「学習者のための辞典には何が必要か」という独創的な発想の賜物である。

彼らの教授法の資料や語彙リストなどのデータはいかに日本人に効果的に英語を身につけさせるか、という視点で今見ても非常に参考になる。その中で語彙指導、辞書使用は彼らの中心的な仕事の一つだった。単に英米の辞典のコピーでは駄目だという強い信念が、*ISED* という画期的な外国人用学習英語辞典の誕生を産んだ。まさに日本の英語教育の歴史の中でも最重要に位置づけられる大恩人と言えるだろう。彼らの「学習者中心」に対する卓見が今、英和辞典の一つの「定番」を作っていると言えるのではないだろうか。

しかし、その後は我々日本人の英語辞書編纂者も負けてはいなかった。Hornby の動詞型は25パターンだったが、それらは P<sub>1</sub>, P<sub>2</sub> のように番号が振ってあるだけで非常に分かりにくかった。これを user-friendly に変えていったのは研究社の『新英和』をはじめとする岩崎民平先生率いる辞書チームであった。いわゆる「現場主義」(ユーザーがその場で見てわかること)を徹底し、後の *LDOCE*, *OALD*, *COBUILD* などの英英辞典の文型表示に多大な影響を与えたのは日本の英和辞典である(ヨーロッパの辞書学者の中にはこのことを知らない人が結構多い)。エクセター大学の Hartmann 博士は去る3月のアジア辞書学会で、「日本に bilingualised dictionary (英英辞典に日本語の訳語を簡単にふったもの)があまりはやらないのは、bilingual dictionary で非常に高性能なものがすでに多数出版されているからだ」とコメントされていた。

### 英和辞典 ——未来の定番は？

さて、紙数が限られているので未来の話に行こう。未来の英和辞典の定番を予測することはかなり冒険であるが、現状でいくつかはっきりとした方向性を感じさせる次のような観点がある。

#### (1) コーパス準拠 (corpus-based)

おそらく今後の英和辞典は、実際の英語資料に直接当たることができるコーパスの利用を余儀なくされるだろう。21世紀初頭の英和辞典には「コーパス・ベースト」というキーワードがどの辞書にもつくようになる。そこでコーパスをどう使ったかという「中身」で

差別化する時代になるだろう。

現代英語のコーパスは規模がどんどん大きくなって4~5億語くらいのサイズが普通になる。現在EU圏外では利用できない BNC (British National Corpus) も、おそらく近い将来利用可能になると予測されるので、一般の出版社が現代英語コーパスを自作しなくともお金さえ出せばアクセスは可能になるだろう。

そこで差別化のためのコーパスの利用方法として、現代英語コーパスを用いた語義頻度分析 (M. West の General Service List などが知られているが、コーパスでの語義の頻度抽出は現在でもかなり困難である) や動詞型プロフィール (OUP の P. Hanks などが提唱している。例えば make がどのような文型頻度を取るかなどをコーパスをもとに詳細に分析したもの: 投野研究室のホームページ (<http://www.u-gakugei.ac.jp/~tefidpt/tonolab/index-j.html>) 参照)、コロケーションのより高度な分析 (t 値, MI 値などの活用) などが辞書の語義配列や用例提示の基準を変える可能性を秘めている。

現代英語のコーパスを使うよりむしろ差別化がしやすいのは、特徴を持たせたサブコーパスの活用の分野であろう。その好例が学習者コーパス (learner corpus) だ。現在学習辞典によく出てくる語法注記や日英比較のコラムは、案外英語教師の経験や「カン」または日本人の犯す間違いなどを集めた本をもとに書かれているものが多い。真にデータによって裏打ちされた日本人学習者の英語学習上の困難点を指摘したり助言できれば、そのコラムは本当の意味で「定番」となるだろう。この鍵を握るのは、学習者コーパスである。大量の学習者の英語発話 (作文) データをコンピュータ処理して、語彙や文法の発達分析を系統的にできる学習者コーパスはこの点で大きな可能性を持っている (例えば, Tono (1995) 参照)。現在、学習者コーパスの作成は世界的にも始まったばかりであるが、日本人学習者のデータを組織的に集める動きもあり (例えば朝尾幸次郎氏のプロジェクト参照 (<http://www.lb.u-tokai.ac.jp/lcorpus/>)), 今後の動向が注目される。

#### (2) 英和・和英の統合——新しい辞典のイメージ

未来の英和辞典は英和と和英が融合されて発信を強く意識した方向に行くものと、「リーダーズ」のように完全に decoding のみに目的を限定して新語・時事語、専門語彙を捨てていくものに差別化されていくだろう。この兆候はある程度現在も見られる。例えば『フェイバリット英和』(東京書籍)のように、英和の項目なのにコロケーション表示の部分だけ和英になって

いたりするのは、その単語を日本語からくる発想を生かしながらコロケーションレベルで使いこなせるようにしようという新しい試みだ。同様に、和英辞典も二度引きしないというように、なるべく英和辞典のような文法情報も盛り込む傾向にある。

これはロングマンが *Activator* でやってみせた「発信型」の一つの形を各社とも模索している証拠である。しかし、単に英和・和英の融合というだけでは新しい辞典のイメージは浮かんでこないだろう。

昨年のヨーロッパ辞書学会では、オックスフォード大学出版局の Sue Atkins 女史が *Dictionary of the Future* というハイパーテキストを用いた新しい辞書のイメージをマッキントッシュでデモをしながら見せてくれた。それは心臓部にコーパスとソーラスを内蔵しており、単語を単に語義で分類するのではなく、Fillmore の frame semantics に基づく動作者 (mover)、場所 (area) などといった frame element で意味の構造を明らかにし、それにそれぞれ同義語辞書が連携しているというかなり凝ったプログラムだった (詳細は Atkins (1996) 参照)。

今後、辞書出版は紙という平面モードでどれだけ情報を入れていくかという100年前と変わらない悩みを抱えていくと同時に、マルチメディアの波に辞書をどう乗せるかという大きな課題をクリアしなければならない。次にそのような電子辞書のレベルで考えてみた時に、おそらく次世代のポイントになるだろういくつかの「定番」候補を考えてみる。

### 電子辞書 ——未来の「定番」

電子辞書の21世紀初頭のトレンドはまちがいない次のような要素を含む商品になるだろう。

#### (1) レベル別辞書のバンドルと共通の検索ソフト

現在すでに紙の辞書を電子化して、それを何本もセットにして売るといった方法はかなり定着しているが、今後そのような方向を推し進めた際に、出てくるのはセットの多様化 (例えば中・高・大などの学習者レベル別、専門分野別など) と異なる辞書なのだが検索ソフトを統一化するという方向であろう。

OUP は Oxford Bookshelf という CD-ROM のシリーズで共通の検索ソフトをバンドルした。これがあると、COD や POD, *Oxford Wordpower* 等の異なる辞書を同じ検索ソフトで引くことができ非常に便利だ。

ちょっとと自然言語処理に強い人ならば、辞書部分の

テキストを解体して全部文字列検索のツールにかけてしまうのだが、やはり普通の利用者は辞書ごとに検索方法が異なるのはとても困る。ソフトメーカーでいろいろな辞書に対応できる検索ソフトを作ったら案外売れるのではないだろうか? 個人的には辞書を入れ替えないで、15冊の辞書をいっぺんにサーチしてくれるようなツールがあると大変ありがたい。

#### (2) マルチユーザーインターフェース

複数辞書のバンドルという方向とは別に、マルチメディア辞書としてユーザーインターフェースに独自の工夫を凝らしたものが現れて欲しいものだ。現在の辞書は平面で情報量が一定だが、コンピュータのハイパーテキストの概念では学習者のレベルに応じて情報量を増減させることが可能だ。例えば、中学生ならば主要な語義と完全文の用例のみ。高校生にはもう少し詳しい語義と句用例や語法記述も見せる。大学生や教師向けには、もっと詳細な用例情報などをコーパスに直接アクセスして取り出せる、など、目的やユーザーのレベルに応じた情報の取捨選択をできるようにする。 (これらのイメージについては投野 (1993) 参照)

#### (3) マルチプラットフォーム

最後に英和辞典に限らないが、未来の辞書の姿はネットワーク上で OS に依存せずに利用するものが主流になるかもしれない。出版社は今後どんな場所でもインターネット上でアクセス可能なオンライン辞書のサイトライセンス化を考えていくといいだろう。そのためにはやはり上記のような OS に依存しない検索ソフトの開発や大量のコーパスを内蔵した辞書のイメージなどを模索していくべきだ。

(東京学芸大学講師)

### ◆参考文献◆

- Atkins, B. T. S. (1996) "Bilingual dictionaries: past, present and future" In M. Gellerstam, J. Jarborg, S-G. Malmgren, K. Noren, L. Rogstorm & C. Rojder Pappmehl. (eds.) *EURALEX '96 Proceedings 1*, Goteborg: Department of Swedish, Goteborg University. pp. 515-546.
- Tono, Y. (1995) "Using Learner Corpora for L2 Lexicography" *LEXICOS 6 (AFRILEX Series)*, Stellenbosch: Buro van die Wat. pp. 116-132.
- 投野由紀夫 (1993) Self-access system: 言語教育における自己学習システムの展開. 伊藤嘉一 他(編) [英語教育学の現在——21世紀に向けて] (堀口俊一教授古稀記念論文集) 桐原書店 pp. 47-58.